

# 「翻訳」を日本語教育に生かすための一試案 コミュニケーション的な視点の取り入れ方と誤用の背景について

板井 美佐

## 要 旨

本稿は、L1 / L2 誤用分析の視点から香港中文大学における「上級中日翻訳コース」で行った調査結果に関する報告である。本調査では翻訳で誤用頻度の高い項目をリスト化し、次に、成績上位者、成績中位者、成績下位者の誤用を 母語干渉 過剰一般化 不注意 文型の理解不足 辞書から引用したもの テキスト構造による混乱 語彙や文型の訳し方が不明 助詞の使い方が不明 記憶違い 勝手な自己解釈、の10のカテゴリー別に集計し、成績別に談話的視点から翻訳文を比較・分析した。成績別に見た翻訳のストラテジー使用の差に関してはインタビューによる分析を行った。その結果、成績中・下位者がどんなことをすれば、成績上位者の翻訳文のレベルに近づけるのに効果的であるか等、支援の方法のヒントを得ることができた。

【キーワード】 翻訳 誤用分析 誤用原因 ストラテジー コミュニカティブな視点

## A Suggestion for Introducing "Translation" into Japanese Education: ways of introducing a communicative viewpoint and analyzing the causes for errors

Itai, Misa

This paper presents the results of a survey conducted from the viewpoint of L1 to L2 error analysis. The author listed the most difficult grammatical points in translation and categorized causes for errors as follows: 1. Language interference, 2. Overgeneralization, 3. Careless mistakes, 4. Lack of understanding of sentence patterns, 5. Dictionary quotations, 6. Text structure confusion, 7. Difficulty in vocabulary and sentence translation, 8. Difficulty with particle use, 9. Memorization errors, and 10. Student's own interpretation, which showed the causes for errors according to their level. The author compared and analyzed the translation papers from the viewpoint of discourse. Regarding differences in translation strategy according to grade, the author analyzed the data by interviews. As a result, the author obtained an indication as to how the lower level students could reach effectively the level of high-grade students.

## 1. はじめに

スキナーによって開発された行動主義的な学習理論のもとで、外国語教授における翻訳の役割は批判的に評価されてきた。特に文法翻訳法はオーディオリンガル法の影響によって、外国語教授法には無関係であるとみなされた。が、コグニティブコード学習理論<sup>(1)</sup>の進歩のおかげで翻訳は教授法論的に洗練された結果、適切で有用な道具として再確立された。

理論的枠組みは異なっても、対照言語学と翻訳学は一つに収斂する傾向にある。それはどちらも固有な方法と目標がありながらも、インターリンガルに分岐する研究に重きを置いているからである。近年外国語教授法の流れを受けて、翻訳教授法においてもコミュニケーション中心の教授法論に注意が向けられている。実際の翻訳の授業にコミュニケーションな要素を盛り込むとするなら、一つに教師主導の翻訳授業から学習者同士のディスカッションによって翻訳を進めていく方法が考えられる。その際、学習者が翻訳作業においてどのようなストラテジーを使っているのかという翻訳プロセスをも射程に入れた研究は、将来的に日本語教育と翻訳学が学際的につながっていく可能性を示している。

以上の流れを受けて、本稿では学習者の主体的な参加を講じた日本語上級レベルにおける「中日翻訳」指導の一例を示しつつ、同時に二つのことを明らかにしたい。一つは中日翻訳における誤用の種類、頻度、原因を探ることである。いま一つは、自然な日本語による翻訳文を構成する要素を、学習者のストラテジー使用と翻訳文における誤用の種類の実態を観察・分析することによって明らかにすることである。

## 2. 先行研究

翻訳学習について Spinner (1980) は、翻訳学習は試行錯誤の2段階からなると述べている。最初の段階は直感的、経験的にコントロールされた情報収集の個別的プロセスで、2番目の段階は転移訓練によって獲得した情報を構造化するプロセスである。そのため教材は、学習者が転移ストラテジーを使用して、それを内在化させることによって誤用を防ぐという矯正的な機能を持つようにデザインされていなければならないし、繰り返し行う練習は、それによって言語知識を「意識化させる」トレーニングであるべきである。

翻訳学における誤用分析を考える場合、第2言語(L2)から第1言語(L1)への翻訳とL1からL2への翻訳では、誤用分析の考え方と方法が異なる。L2/L1の誤用分析ではL1ではなくL2から出てきた誤用を扱わなければならない。この場合の誤用は不十分なL2原文の理解と不十分なL1転移能力が原因である。一方、L1/L2誤用分析では表層的誤用だけを扱い、誤用原因の大きなものはインターリンガル干渉、過剰一般化、不十分な教授教材の3つのカテゴリーからなる(Corder, 1975)。従って、L1/L2誤用分析の問題を解決するには、対照言語学と誤用分析の2つのアプローチが使えるが、L2/L1誤用分析は複雑な誤用概念を扱わなければならない。そこで、実際の授業ではL1/L2翻訳の場合、学習者のL1の理解とL2の表現という形で学習者の言語運用をどのように実践させ

ていくかが鍵となる。

従来 L2 の教育現場では、L1 で考え翻訳させることは、L1 による母語干渉が起こって、L2 学習を阻害するという考え方が根強かったが、Edelsky (1982) による L2 の作文生成プロセスに関する研究では、L1 使用が L2 作文作成を阻害するとは限らないという研究報告が出ているし、Zamel (1983) によれば、学習者は L1 の書く能力やストラテジーを転移させているらしい。石橋 (1997) も L1 が L2 の作文に及ぼす影響を分析し、誤用が学習者の仮説検証の機会とするならば、L1 で書き L2 に翻訳する作文は語彙学習の機会とすることが可能であると結んでいる。

外国語学習においてカリキュラムの最終レベルに位置するのが、「翻訳 / 通訳」コースであり、「翻訳」コースが総合的な目標言語訓練の場であることは論をまたない。筆者は「上級中日翻訳」を目標言語である日本語習得を加速させるという役割を担っていると位置づけた上で、次章で翻訳指導の概要を述べ、翻訳コースで収集したデータ分析へと続けたい。

### 3 . 翻訳指導の概要

#### 3 . 1 翻訳コースの位置づけ

香港中文大学における主専攻クラス言語系科目は以下のようになっている。学生数は 1 学年平均 24 名のクラス編成である。1 学年では週 11 コマ ( 1 コマ 45 分 ) の授業があり、学生は日本へ留学するために必要な初級文法とコミュニケーションスキルを学習した後、2 学年で日本へ 1 年間留学する。3 学年では日本で習得した言語知識とスキルを足掛かりとして、さらに高度な日本語能力を身につけさせるための言語スキル別コースが用意されている。筆者が担当した「上級中日翻訳」コースはその中の 1 つである。

#### 3 . 2 翻訳指導の流れ

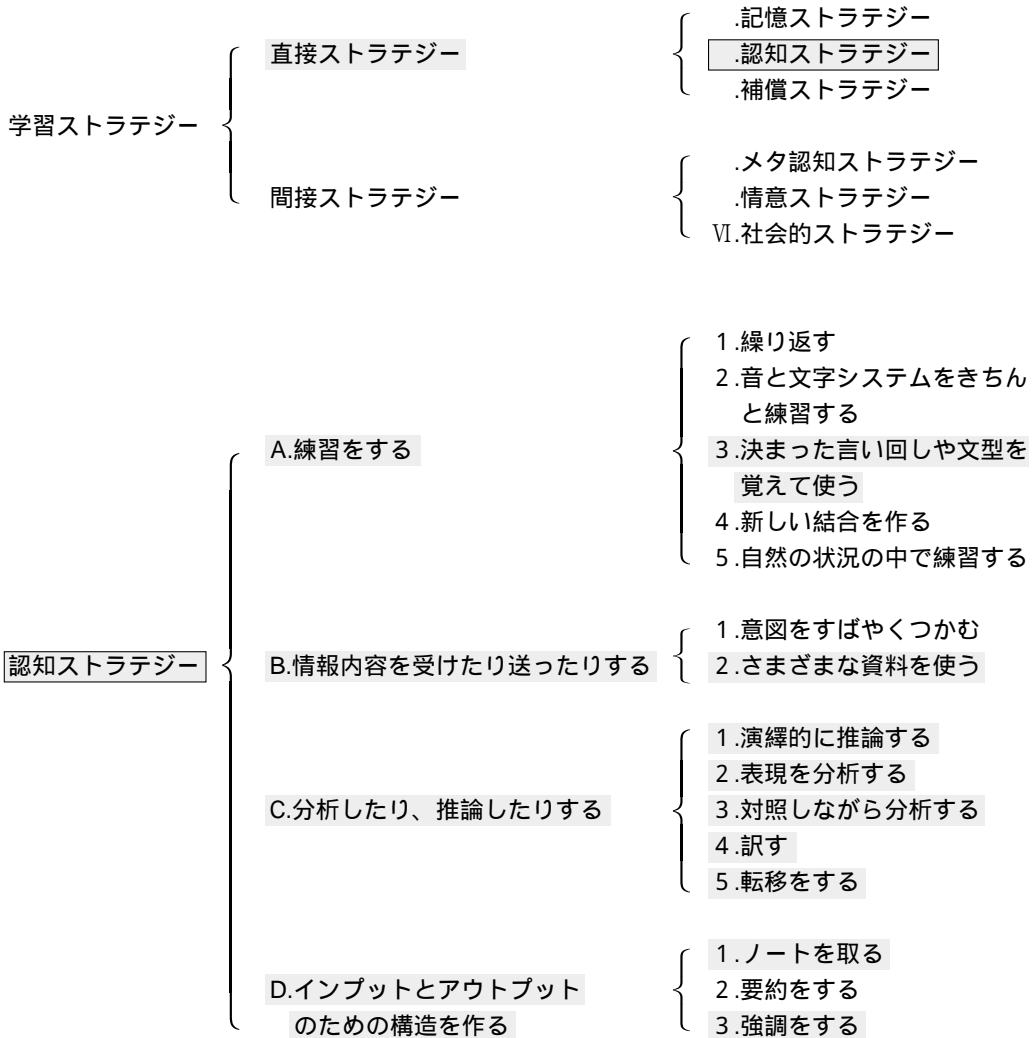
翻訳の授業は週 3 コマである。初めの 2 コマを利用して、文型・ポイント学習を行った。3 コマ目が実際の翻訳作業であるが、1 コマの時間が少ないので、ペースとしては 2 週間で 1 つの教材を翻訳させた。

コースにおける目標は、正確に原文の内容を理解すること、なるべく自然な日本語を書くこと、特別な理由がない限り逐語訳は避け、正確な直訳を行うこと、である。

クラスにおける翻訳練習は基礎練習から段階的に行った。つまり、実際の翻訳作業に入る前に、学習者にまずテキストタイプについて学ばせ、書く技術の基礎作りを行わせた。

次に練習段階に入るわけだが、その前に翻訳学習で学習者がどのような学習ストラテジーを用いる可能性があり、それがどのような能力を促進する効果があるかについて考えてみたい。Oxford (1994) は学習ストラテジーを大きく 2 つに分け、その下に 6 つの下位項目をもうけている。そしてさらに、認知ストラテジーの下には 4 つの下位項目を提示している。

表1 学習ストラテジー



認知ストラテジーにおける項目 A、B、C、Dは、翻訳作業を行う際、最も多く使用するストラテジー群であり、翻訳作業を構成する要素であると言ってもいい。実際の授業構成の大きな枠組みは文型練習とポイント学習（倒訳、加訳、変訳、不訳等）からなる。前者は「決まった言い回しや文型を覚えて使う」練習であり、後者の役割は、学習者は中日両概念が同じであることを期待しているので、不正確な「転移」を防ぐための練習である。筆者は、教師は学習の支援者であり、学習者は認知心理学における能動的な学び手であると捉えているので、学習者に自らの学習に対して強い責任を持たせるために、文型練習は自らの力で自らの答えを引き出すよう働きかけた。具体的にはディスカッションによる形式である。Seliger (1985)によれば、ディスカッションという方法を用いることによって文の修正が行われ、学習者による仮説の形成、検証、修正が起こる。

最後が実際の翻訳作業である。翻訳の素材であるテキストは、問題が語彙レベルに留まっている新聞や雑誌の社会欄に出ている一般的な記事と日・中関係に話題を限定した政治・経済関係の記事である。以下にいくつか授業で使用した教材を示す。

1. 百科事典の記事（ピラミッド、万里の長城、紫禁城）
2. 新聞記事（毒入りカレー事件、インターネット殺人事件）
3. 漫画（金田一少年の事件簿、ちび丸子ちゃん）
4. 対外貿易契約書

学生は事前に教材を2人1組のペアで翻訳してから、授業に臨むことが期待されている。クラスではペアごとに作成した翻訳を板書し、その後ワークショップ形式で学生が自由に意見を述べあえるようなグループ討論を行わせた。筆者は誤用訂正をすぐには行わず、批判するよりできるだけ学生に質問するというプロセス主導のクラス形式を選択した。最終的な誤用訂正もすべての誤用を訂正するというのではなく、いくつかの翻訳文の内、どれがより望ましい翻訳なのかという質的評価を行った。学生が翻訳に慣れてきたコースの後半では、翻訳の問題が語彙的ではなく、文化的である漫画をテキストとして紹介した。何回かの試行錯誤を繰り返して、より満足がいく翻訳にたどり着くというプロセスを経て、学生が自ら翻訳のプロセスをモニターすることで、メタ認知技術を習得し、伸ばすことができるような訓練を行うことが、このコースの潜在的な目標であった。

翻訳の評価は、各文型練習の後に配布した宿題、中間試験、期末試験及び修了レポートに対する評価である。修了レポートはA4サイズの記事(文学や漫画等翻訳が出ているものを除く)を各自選んで、翻訳するという課題である。採点基準は「正確さ」「テキストタイプ<sup>(2)</sup>」「自然な文<sup>(3)</sup>」を3本の柱とし、「正確さ」を測定する指標として、「文法」「語彙・表現」「文の結節」を、「自然な文」の指標は「全体のまとまり」を使用した。

## 4. 調査概要

### 4.1 調査の題材

現在までのところ、日本語教育における中日/日中翻訳の理論的位置づけも方法論の整備もなされていない。さらに、翻訳する際に起こる誤用のメカニズム、そして学習者が言語的、社会言語的な既有知識やストラテジーをどのように活用して翻訳していくのかに関するプロセスも明らかにされていない。

そこで、本稿では翻訳文の中から誤用頻度の高いものをまずリスト化し、各項目の全誤用数に占める比率を示す。次に、成績上位者、成績中位者、成績下位者の誤用を、母語干渉、過剰一般化、不注意、文型の理解不足、辞書から引用したもの、テキスト構造による混乱、語彙や文型の訳し方が分からなかったもの、助詞の使い方が分からなかったもの、記憶違い、勝手な自己解釈、の10のカテゴリー別に集計し、成績上位者と成績下位者が翻訳した文を談話的視点

から比較・分析する。最後に、成績別にストラテジー使用にどのような差があるのかをインタビューによって分析する。これは成績中・下位者がどんなことをすれば、成績上位者の翻訳文のレベルに近づけるのに効果的であるか、学習者のどの面に配慮すれば、学習者のストラテジーを促進できるのか等、支援の方法のヒントを得るためである。

#### 4.2 被調査者と資料の採集方法

対象者は香港中文大学日本研究学科主専攻クラス中日翻訳コース（1学期間：15週）で学ぶ学生13名で、誤用データは学生がこの期間中に書いた翻訳文、858文を採集した。成績上位者と成績中・下位者の翻訳文の相互比較は修了レポートから得たデータである。修了レポートは中国時報の江沢民訪日に関する記事で、翻訳の際に学生が使用した辞書は中日大辞典（愛知大学）、日漢辞典（大正書店）、精選中日/日中辞典（東方書店）、英和中辞典（小学館）等である。

#### 4.3 結果と考察

##### 4.3.1 学習者の誤用の全体

表2 学習者の誤用の全体

順位	誤用の種類	誤用度数	全体比率
1	語彙・表現	298	36.8%
2	主題・主語	100	12.4%
3	接続詞	86	10.7%
4	語順	72	8.9%
5	表記	60	7.4%
6	テンス・アスペクト	49	6.0%
7	格助詞	46	5.7%
8	やりもらい	28	3.4%
9	文末・ムード	22	2.7%
10	否定・肯定	10	1.2%
11	指示詞	10	1.2%
12	自・他	8	0.9%
13	受身	8	0.9%
14	取立助詞	8	0.9%
15	文体	8	0.9%

表2は学習者の誤用の頻度が高いものを15位まで順に並べたものである。学習者の誤用が多かったものは、語彙・表現、主題・主語、接続詞、語順、表記であった。特に語彙・表記の誤りは全体の4割近くに上っている。

#### 4.3.2 学習者のストラテジー使用

インタビューによると、学習者は下位者、中位者、上位者に限らず、認知ストラテジーをよく使用していることが分かった。成績上位者は中でも「決まった言い回しや文型を覚えて使う」と「情報内容を受け取ったり送ったりする」の「さまざまな資料を使う」ストラテジーを効果的に使用し、日本語を体系的・包括的に学習しようとしている。さらに、メタ認知ストラテジーのモニター方略を頻繁に使用しているため、誤用そのものに厳しく、同じ誤用の繰り返しを防いでいる。結果的にストラテジーの精密度が要求される類義語の使い分けについても、入力情報の処理の自動化がすばやくなされ、適切な類義語を選択・使用することになるのである。教室外でもメタ認知ストラテジー使用によって日本語のインプット、アウトプットを多くするためのストラテジーを絶えず試みている。一方、成績下位者は成績上位者が使用している認知ストラテジーの使用回数が少なく、不足部分を自己解釈によって補っている。成績中位者は上位者と下位者の中間に位置していた。つまり、「さまざまな資料を使う」の認知ストラテジー、メタ認知ストラテジーのモニター方略のどちらに関しても成績上位者よりはききが甘いということである。教室外においてもアウトプットと比較して、インプットを多くするためのストラテジーをあまり積極的に使用していない。

#### 4.3.3 レベル別誤用状況と原因

表3・表4を見ると成績上位者にも語彙・表現の誤用はあるが、成績中・下位者と比較すると、かなり母語干渉と過剰一般化が少なくなっていることがわかる。

表3 レベル別誤用状況

	成績上位者	成績中位者A	成績中位者B	成績下位者
文の数	40	33	41	41
語彙・表現	25	74	60	101
格助詞	6	29	12	18
接続詞	8	15	11	19
文末・ムード	12	11	10	16
主題・主語	3	11	8	10
指示詞	4	10	5	9
テンス・アスペクト	1	5	4	5
名詞化	0	4	6	7
文字・表記	0	2	1	4
可能	0	1	4	2
語順	1	3	2	0
受身	1	1	0	2
自・他	1	0	0	3
文体・敬語	1	0	0	1
のだ文	0	1	0	0
活用	0	1	1	0

表4 レベル別誤用原因

誤用原因	成績上位者	成績中位者A	成績中位者B	成績下位者
母語干渉	11	37	44	60
過剰一般化	13	31	26	66
不注意	29	50	38	61
文型への理解不足	14	30	21	25
辞書の引用	14	17	24	1
語彙や文型の訳し方が不明	5	5	5	1
助詞の種類が不明	3	20	2	9
記憶違い	8	8	4	9
テキスト構造からの混乱	1	3	1	0
自己解釈	5	0	0	6

成績中位者の誤用の多くは語彙・表現の誤りであり、格助詞、接続詞、文末・ムード、主題・主語の誤用がそれに続いている。語彙・表現の誤りの原因を見てみると、母語干渉、過剰一般化、不注意が多いことから、成績中位者がまだ習得の過程にあって、母語の干渉から抜けきれていないことが分かる。そして、その分辞書を引く際の類義語の意味の微妙な差や使い分けに対する習熟度が今だ不十分で、かつ訳に頼りすぎた結果、誤用が起きている。これは、辞書の引用からの誤用が少ない成績下位者と対照的な結果であるが、成績下位者は辞書を有効に使える段階に到達していないことから出てきた結果ではないかと思われる。(表4参照)

表5 成績上位者と成績下位者の翻訳文の比較

<原文<sup>(4)</sup>>

二次世界大戦的軍国主義は假大和精神肆行的,日本怎肯否定那個時代呢?尤其是面對中共這個假想敵,它握有日本所沒有的核武力,又是聯合國安里曾常務理事國,經濟情況也蒸蒸日上。日本如果認真道歉,便永落下風,休想與中共分庭抗禮,更不要說是超越了。但對中共目前的戰略而言,如抓住日本這個理虧的弱點,便等於有了對付的法寶,無論什麼事,中共都可以當年「被厭迫者」與「受害者」的立場向日本大聲呼喊,甚至如果有動武情形也曾抬出理由。

<成績上位者の翻訳文>

第2次世界大戦における軍国主義は虚偽と大和精神によるものであるだけに、日本はあの時代を否定するわけがないではないか。特に立ち向かっている仮想敵国の中共は、日本にはなき核兵器を保有し、しかも国連安保理常任理事国でもあり、経済発展も向上する一方である。もし日本が誠に謝ったが最後、永久に劣勢に陥ってしまい、中共と並び立つことができないばかりか、超えるどころではない。



#### < 成績下位者の翻訳文 >

第2次世界大戦の時の軍国主義は、大和精神を基づいて行われたものなので、日本人にとっては否定できないままではないか。特に中国共産党という敵人は、日本がない核武器を持ち、国際連合の中心メンバーで、経済発展もよくなってきた。もし、日本は誠に中国に謝罪すると、永遠に下の人になるかもしれない。中共と対立しようとか、中共を超えようとするとかもできないはずだ。

表5は成績上位者と成績下位者の翻訳文の一部を抜粋したものである。翻訳文からの分析を行うと、成績上位者は接続詞等の文の結束性を表す言葉の使い方が上手で、文章の一貫性を考えながら、上級レベルの接続詞を多用している。一方、成績下位者は文の結束性を理解はしているものの、全体の構成や文章の一貫性に関しては注意が行き届かず、使用している接続詞も初・中級レベルのもので、それが文の読みにくさにつながっている。

#### 5. まとめと今後の課題

本調査から、学習者の誤用の種類、頻度、原因はさまざまであるが、ある一定の項目、つまり、語彙・表現、主語・主題、接続詞に誤用が集中していること、誤用原因に関しては、成績上位者は下位者より母語干渉と過剰一般化が少なく、母語の干渉から遠くなることによって、より自然な日本語を獲得している状況が明らかになった。そして、当たり前のことであるが、文型・文法に関する知識がきちんと定着していることも自然な翻訳文を書くために欠くことのできない条件である。

今回の分析は成績別のデータ数が少なかったため、次回はデータ数を増やして、さらに精密な分析を行いたい。そして、翻訳文のどこからを誤用とし、どこまでを許容とするかについての考察も行うつもりである。

#### 注

- (1) Willss, Wolfram (1982) *The Science of Translation: problems and methods*.
- (2) ここでのテキストタイプは論説文における文体を指す。
- (3) 学習プログラムや教育的配慮から訂正を最小限にする場合もあるが、意味が通じるので、間違えとは言えないというレベルより目標をより1段階高いレベルに置き、ここでは全体を自然な流れにすることを目標としている。従って、翻訳コースの質的評価と矛盾するものではない。
- (4) この原文は広東語話者によって書かれた北京語であるため、北京語話者から見ると、やや不自然な表現が使われている。

## 参考文献

- 1 . Edelsky, C. (1982) Writing in a bilingual program: the relation of L1 and L2 texts. *TESOL Quarterly*, 16: 211-228.
- 2 . Spinner, H.F. (1980) *Theorienpluralismus in Wissenschaft und Praxis*. In G.A. Neuhaus: 34-58.
- 3 . Corder,S.P. (1975) Error Analysis; Interlanguage and Second Language Acquisition. *Linguistics and Language Learning*, 8: 201-218.
- 4 . Seliger,H. (1983) Learner interaction in the classroom and its effect on language acquisition. In Seliger, H.and M. Long (eds.) *Classroom Oriented Research*. Mass: Newbury House.
- 5 . Zamel, V. (1983) The composing processes of advanced ESL students: Six case Studies. *TESOL Quarterly*, 17,79-101.
- 6 . Willss, Wolfram (1982) *The Science of Translation: problems and methods*.
- 7 . 石橋玲子(1997)『第1言語使用が第2言語の作文に及ぼす影響 全体的誤用の観点から』『日本語教育』95号 : 1-12
- 8 . レベッカ L. オックスフォード (1994) 『言語学習ストラテジー』 凡人社

謝辞 本データ収集にあたって、ご協力くださった香港中文大学の欧陽凱明氏、劉嘉敏氏、陳藝氏、江新偉氏に御礼申し上げます。